

津波、助けられない。母に何度も「大好きだよ」

私の思い 世界中に

東日本大震災で家族を亡くした宮城県の高中生ら7人が、14日から16日まで中国・大連で開かれる世界経済フォーラムの「夏季ダボス会議」に参加する。各国の首脳や経営者らを前に被災体験や被災地の現状を伝え、支援を訴える。生徒らは「つらい思いをしたが、世界中が被災地に関心を持ち続けてもらえるよう生の声を伝えたい」と意気込んでいる。



出発前の記者会見で意気込みを語る菅原彩加さん(12日、東京都港区)

女子高中生ら「生の声」 中国の国際会議参加へ

12日、東京都内で記者会見に臨んだ7人の中に、仙台育英高校(仙台市)1年の菅原彩加さん(15)の姿があった。津波で宮城県石巻市の自宅が流され、一緒にいた母(34)と祖母(65)が亡くなり、曾祖母(83)が行方不明になった。

3月11日は中学校の卒業式。帰宅後すぐに強い揺れが襲い、間もなく地鳴りとともに濁流が家のみ込んだ。がれきをかき分けて出ようとすると、母が呼ぶ声。しかし母の足はがれきにはさまれ、動かせなかった。

このままだと自分も流される。悩んだ末に自分だけ避難せざるを得なかった。別れ際に「ありがとう。大好きだよ」と何度も繰り返した。もっと伝えたいことがあったのに……。思い出すたびに涙があふれる。

高校に進学して仙台市で独り暮らしを始めた後、震災遺児の支援団体を通じて夏季ダボス会議に参加できる機会があると知った。「ニュースで十分に伝わっていない被災者の思いや体験を世界中に知ってほしい。これ以上ないつらい体験をした私だからできる」

助ける仕事に就きたいと考えている。海外から受けた多くの支援に対する恩返しとして、国際ボランティアにも取り組むつもりだ。「震災で失ったものは大きい。得られたものもあった。それは自分の行動次第でいくらでも増やしていける」

夏季ダボス会議は世界経済フォーラム(本部スイス・ジュネーブ)の主催で、2007年から中国で開かれている。各国の政治家や経営者、非政府組織(NGO)関係者、芸術家ら約1500人が参加し、様々なテーマで議論する。

被災した若者を派遣するのには、国内の若手起業家が震災後に設立した財団法人「教育支援グローバル基金」(東京・渋谷)。宮城、岩手、福島3県に住む高校生と大学生を無償で派遣し、複数の会合で被災地の状況を説明したり、四川大地震の遺児らと交流したりする予定だ。